

# 「美味しい」ってなんだろう

岡部元洋

## 1. はじめに

家の近くにあるラーメン屋のラーメンがとても好きだ。煮干の香りが漂う濃厚なスープは口に入れる前からその味が想像される。スープの中には噛む感触をしっかりと楽しめるコシのある中太麺がその身を隠している。その上には、ゆで卵とメンマとチャーシューが一切れポツンと浮かんでいて、飾ろうとしないその見た目が一層食欲をかきたてる。

しかし、そのお店は今まで掃除をしたことがないのではと思えるほど汚い。また店主さんが一人で切り盛りしているが、愛想がまるでない。客は一人で来る人が多く、皆黙々とラーメンを食べる独特の雰囲気を持ったお店である。その雰囲気に抵抗がある人も多く、自分の周りではあまり評判はよくない。しかし私は他の食べ物では得られないような美味しさをそのラーメンに感じる。

なぜ私はそのラーメンにこれほどの美味しさを感じるのだろうか。その理由を考えてみると、単に味が良いというだけではなく、他の要素も美味しさを感じさせる要因になっていることに気づいた。具体的には、カウンターしかない店の造りが店主さんとの親近感を生み出していること、営業時間が昼の短い時間だけであり、食べる期間が限定されていること、行列ができるため期待感が高まることなどである。このような味以外の要素も自分に多くの満足感を与えているのではないかと思った。

食べ物の味以外の要素から美味しさを感じた経験は他にもある。例えば、久しぶりに実家に帰り懐かしい料理を食べたときや、気の置けない仲間と楽しく食事をした時などである。これらの経験からも美味しさは味覚によってのみ作られるものではないと考えられる。

味以外の要素によって美味しさを感じるという経験を不思議に思い、美味しさはどのようにして構成されているかを実際に他の人の語りから調べてみようと思った。

## 2. 先行研究

### 2-1 美味しさの分類 日本うま味調味料協会 HP より

美味しさがどのようにしてできているかを知るためには、美味しさとは何を指しているかを知る必要がある。その言葉の定義を JIS 規格「官能検査用語」に収録された味覚用語を参照すると、「美味しさ」とは

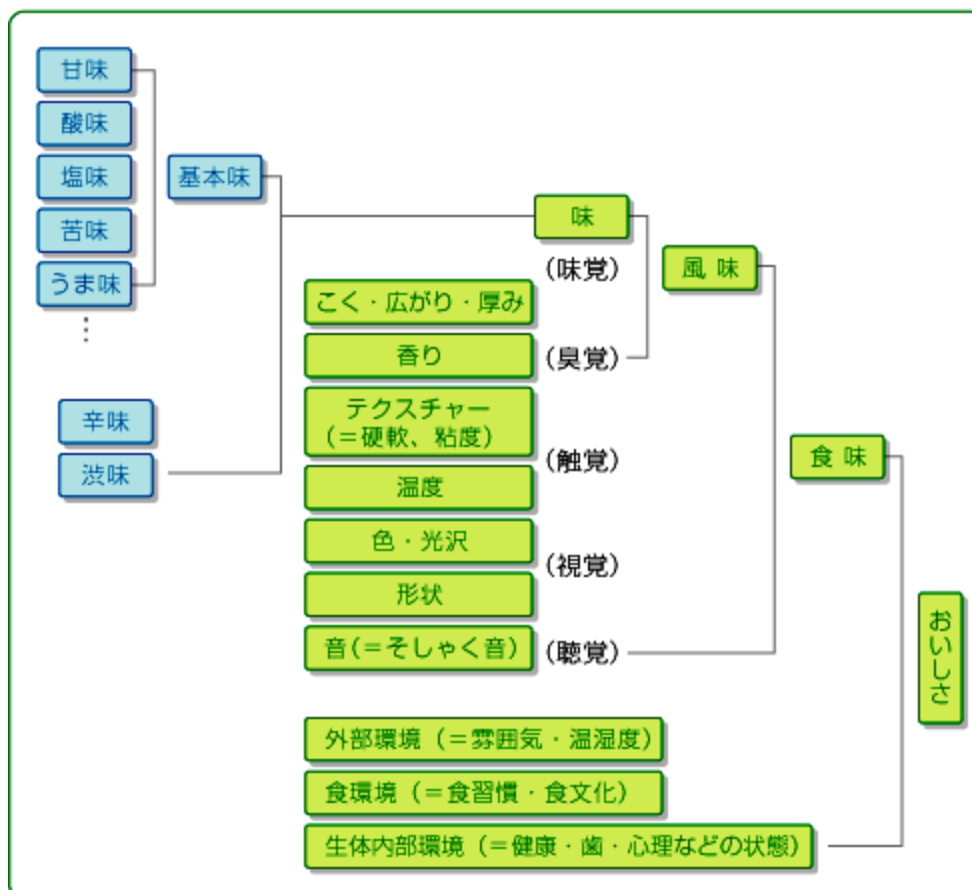
「食品を摂取したとき、快い快感を引き起こす性質」

と記されている。この研究は、美味しいという快感を生み出す要素を調べ、美味しさはどのように構成されているかを調べるものである。

美味しさと混同されやすい言葉として「うま味」という言葉がある。これは味の5つの基本味（うま味、甘味、酸味、苦味、塩味）の一つであり、味を作る要素の一つである。

この基本味と美味しさの関係については参考資料として下にまとめる。

### 食べ物のおいしさと基本味



(出典 日本うま味調味料協会HP) <http://www.umamikyo.gr.jp/knowledge/index.html>

「美味しさ」という快感については既にいくつかの研究がされており、ある程度「美味しさ」を構成する要素の分析が科学的にまとめられている。

美味しいという感覚は、味蕾で感じる甘味、塩味、苦味、酸味、うま味の組み合わせだけでなく、渋みや辛味のように刺激として受け入れる感覚も含めて総合的なものである。一応、味=味覚として感じているが、その上に、香りという嗅覚までを含めての風味、さらに硬い軟らかい、粘り気の有無といったテクスチャー、それに食べ物の温度まで合わせての触覚、色や光沢、形状といった視覚、食べるときに発する音を捕らえた聴覚まで合わせて、総合的に食味である。さらに、食べている場所の雰囲気であるとか、温度湿度がどの程度であるか

という外部環境、どんな食の習慣、文化を持っているかという食環境、さらに健康状態、歯の具合、あるいは心理状態などの生体内部環境まで含めて、感覚を総動員して、「美味しさ」を感じている。

## 2-2. 科学的に検証された美味しさ 伏木亨『人間は脳で食べている』より

筆者は、美味しさは既存の学問分野では捕えきれない複合的な領域ではあるが、美味しさを構成する要素によって分類することによって科学的に検証可能であるとした。以下は分類された4つの美味しさである。

- (1) 生理的な欲求に合致する美味しさ
- (2) 生まれ育った国や地域あるいは民族などの食文化に合致する美味しさ
- (3) 脳の報酬系を強く刺激してやみつきになる美味しさ
- (4) 情報にリードされる美味しさ

- (1) 生理的な欲求に合致する美味しさ

食物の味は、信号としての意味を持っている。甘味は糖の存在を意味しており、塩味は電解質、旨味はタンパク質である。また、酸味や苦味は避けるべき物質の存在を知らせている。脂肪の味は味覚ではないかもしれないが、大量のエネルギーの存在を知らせる信号である。動物にとって、必須の栄養素や体構成成分が欠乏し始めると、動物はそれを回避しようとして猛烈にその物質を欲求する。激しい運動の後、水が飲みたくなることや疲れたときに甘いものを食べたいことなどである。その欲求に叶う食べ物は大きな快感を生み出し、美味しく感じられる。人間の欲求は、無意識のうちにこのような動物としての生理に左右されている部分が多い。

表1 味覚の栄養素信号としての意味

甘味	糖の存在	カロリー、血糖の源
塩味	ミネラルの存在	電解質の摂取
旨味	グルタミン酸	タンパク質の摂取
酸味	酸類	未熟な果実、腐敗
苦味	化学物質	異物の存在
脂肪		高カロリー

(出典 HP 伏木組 コラム第一回 「美味しさ」は科学的にはどのように説明されるのか)  
<http://www.nutrchem.kais.kyoto-u.ac.jp/fushiki/Oishisa1.html>

## (2) 生まれ育った国や地域あるいは民族などの食文化に合致する美味しさ

民族や地域、あるいは家庭など、人間が食生活を営む集団の中で独自の味付けが生まれ継承される。幼い頃から食べなれた味わいは、安心感を与え、美味しさを感じさせる。食べなれない味や食材にはしばしば違和感を覚える。

各民族や地域が固有の好みを持っている理由は明らかである。親や周辺が食べていたから子も食べる。これが繰り返されるからである。民族の交流が活発ではない地域では特に文化の影響が顕著である。子供の頃から、刷り込まれた味や匂いは、安全で信頼できる風味として定着し、安心できる。

## (3) 脳の報酬系を強く刺激してやみつきになる美味しさ

やみつきの美味しさは、脳の報酬系で発生する。報酬系とは、ヒト・動物の脳において、欲求が満たされたとき、あるいは満たされることが分かったときに活性化し、その個体に快の感覚を与える神経系のことである。快感を強く生じる食べ物には、動物や人はやみつきになる。その効果は、アミノ酸、脂肪、甘味などを摂取することによって生じるので、これらを含むチョコレートやラーメンなどは熱狂的に好んで食べられる。

例) チョコレート・・・脂肪・甘味

ラーメン・・・・・・アミノ酸・脂肪

## (4) 情報にリードされる美味しさ

人間は文字を介して容易に情報が得られるため、動物のように食べ物をいちいち舌で確かめなくても安全の情報は得られる。スーパーマーケットでは袋の表示を読めば、安全に関するたいの情報が得られる。製造年月日、賞味期限はもとより、信頼できるメーカーであるか、どのような添加物が使用されているか、などなど。もはや、いちいち舌で安全を確かめる必要がなくなったのである。しかし、これが、人間の食べ物に関する感覚を鈍くしている要因の一つでもある。自分の舌での判断が難しくなった今日、皮肉にも氾濫する情報に振り回されている。安全、美味、価格、産地情報は人間の場合美味しさの大きなウエイトを占める。

### 3. 研究・調査

#### 3-1. 研究方法

「美味しいとは何か」を考えた先行研究は、その疑問に何らかの答えを示すものである。日本うま味調味料協会HPに記載されていた図は、美味しさの構成要素を人の五感を中心に体系的にまとめたものである。美味しさとは快感であり、味以外の要素も美味しさの構成に寄与することがはっきりと意識されている。

伏木亨の研究では、美味しさをその構成のされ方から4つに分類できると判断し、独自の四分類それぞれに科学的な検証を試みた。これらの二つの美味しさの解釈は異なる着眼点により捉えられたものである。

先行研究における二つの美味しさの解釈は、美味しさの輪郭を知る上で役立つものであったが、それは私が知りたいと思う姿が見えたわけではなかった。

日本うま味調味料協会HPで示されていた美味しさの構成要素の体系は、その構成に関係する要素全体を知ることではできても、「ある美味しさ」がどのような要因によって、どのように構成されているのかはわからない。私の「あるお店のラーメンが美味しかった」という経験に対して、「それは、味や風味や食味や外部環境などが影響しあって美味しく感じた」という説明では結局何もわかっていないのと同じである。

また伏木亨の研究では、具体的な美味しさを4つに分類することによって説明していたが、実際の「美味しい」という経験は、その四分類は重複し合ったりして、その美味しさが何によって構成されているかはわかっていても、どのように生まれたのかを示すことはできない。「美味しい」と感じたとき、それが何による美味しさであるかを、分類に当てはめることによって説明するのは限界がある。

先行研究では、どちらも分類に当てはめることにより美味しさを見るという方法であった。私は、ある特定の美味しいという経験を検証することにより、美味しさについて見えなかった部分を見出そうと思う。その方法としてインタビューを用い、人が美味しさを語る時の語りの中から美味しさとは何かを見ていきたい。

#### 3-2. インタビュー

インタビューの方法は同年代（大学生18～24歳）の男女A～Sの19人（男：女=11人：8人）に特定の美味しさの経験について聞き、その語りの分析を試みた。

今回、美味しさを知るための題材としてビールを選んだ。周知のとおり、ビールは苦い味がする飲み物である。伏木亨の研究で言われていることだが、苦味と酸味というのは、そもそも身体にとって害となるものを感知する味覚である。しかし私達はその苦味を美味しさとして味わっている。

題材にビールを選んだのは、本来の生理的に好ましくない味であるにもかかわらず、美

美味しいものとして認められている理由を探り、美味しさの一面を見てみようと思ったからである。またビールはコミュニケーションを円滑にする道具として使われる。そのため他の苦味や酸味を伴う食べ物より、多くの物語を伴い、語り手が話しやすくなるのではないかと考えた。

インタビューは1対1または1対2で行い、基本的にはビールの美味しさとそれにまつわる経験について好きなように話してもらった。本人から話さない場合、「常に美味しく感じるか。(ビールを美味しいと感じる人対象)」と「美味しいと思うようになりたいか、または、なりたかったか。」の二つの質問は積極的に尋ねるように心掛けた。以下にインタビューに答えてくれた人の性別と話の要点を記す。

#### Aさん(男)

美味しい。一人では飲まない。疲れたとき美味しい。大学に入って飲んだ。まずかった。後に「のどで味わう」って言われてから美味しく感じた。一人ならチューハイ飲む。

#### Bさん(男)

飲み会じゃないと飲まない。缶だと不味い。慣れようと大学入学前に毎晩一本飲むことをノルマにした。でも一本飲めなかった。一人ならチューハイを飲む。チューハイのほうが美味しいがビールのほうが飲みたくなる。

#### Cさん(女)

最初の一口だけ美味しい。一杯全部はいらない。一人では飲まない。最初は美味しくなかった。大学2年くらいから飲めるようになった。美味しく飲めるようになりたいとは思わない。

#### Dさん(男)

疲れているとき美味しい。一人でも美味しい。最初は美味しくなかった。20歳越えてから美味しいと思うようになった。

#### Eさん(男)

一人では美味しいと思わない。飲み会の最初の一杯だけ美味しく思う。

#### Fさん(男)

あんまり好きじゃない。最初の一口は美味しいと思う。ビールを一人で飲まない。お酒自体一人で飲もうとは思わない。初めて飲んだのは文化祭だった。そのときは楽しくて美味しく感じたかもしれない。最初の一口、二口は美味しい。

ビールを美味しく思うようになりたいとは思わない。お酒を飲めるようになりたいとは思わない。

Gさん（男）

ビール好き。夏は好きになる。冬はあんまり飲みたくない。お腹一杯のときはそうでもない。何かやり遂げたときに美味しい。運動したときとか美味しい。夏は一人でご飯と一緒に飲む。親からちょっともらったとき不味かった。大学るとき他に飲むものがなくて仕方なく飲んだら美味しかった。ある日突然美味しく感じるようになった。ビールはのど越しが美味しい。強いお酒が飲みたいけど、とりあえずビール。ビールじゃ酔えないから強いお酒が欲しくなる。酔うために飲むものではない。

Hさん（男）

全く嫌い。美味しく思えるようになりたい。

Iさん（女）

一人では飲まないが、誰かと一緒だと楽しくなれる。味自体はそんなに美味しくない。最初の一年くらいは不味かった。美味しく思いたい。飲み会るとき飲めるといいので。

Jさん（男）

美味しい。最初は何で飲むのかわからなかった。だんだん良さがわかってくる。親が「ビールはのど越し」といわれてからのどで味わうようにした。受験前でお酒を飲まないようにしていたけど、久しぶりに飲んだビールの味は忘れない

Kさん（男）

超嫌い。苦いので嫌い。すっぱいもの、辛いものは好き。最初の一杯は我慢して飲む。すぐ次の酒が欲しい。大学に入ってしばらくたった頃、美味しいと思ったこともあった。イッキで気持ち悪くなってから嫌いになった。

Lさん（女）

のど越しが好き。甘いのが好きじゃない。苦さが好き。大学に入って、初めて飲んだときは美味しくはなかった。ある時ビールを飲んでみたら美味しかった。最初がいなあと思ったが徐々に変わった。周りの先輩がイッキしていて自分もああんりたいと思った。乾杯の一杯が好き。一人では飲まない。一人で飲んでも美味しいかもしれないが飲もうとはしない。みんなで楽しく飲むものという先入観があると思う。

Mさん（男）

ビールは結構好き。一杯目は美味しいが二杯目は苦い。寝付けないときは飲んだりする。種類は何でもいい。最初は好きじゃない。大学二年頃から徐々に変わっていった。味覚が変わったか慣れた。飲めた方がいいとは思っていた。たくさん何度も飲むと慣れる。飲んでいくうちに一杯くらいは美味しく感じる。つまみによって美味しく感じることもある。ビール単体じゃあちょっと欲しくない。

Nさん（男）

ビールは美味しい。ビールは宇宙。たくさん飲むと炭酸がたまって辛い。最初は美味しいあとから不味い。一人では飲まない。文化祭の打ち上げで飲んだとき最高だった。

Oさん（女）

ビールは美味しくない。においも嫌だし、味も苦くて嫌だ。アルコールもあまり好きじゃない。飲み会で全然飲めないと嫌だから、飲めるようになりたい。

Pさん（女）

ビールは美味しくない。苦い。みんなと一緒にだと飲む。飲み会の席で一杯目は必ずビールなので美味しく飲めるようになりたい。

Qさん（女）

ビール好き。初めの一杯はビールを飲む。ビールを飲むと「飲みに来た！」って気分になる。

Rさん（女）

不味い。大嫌い。苦い。のど越しが良いとか言うけど、理解できない。ビールを飲めるようになりたい。最初の乾杯のときに飲めないから。

Sさん（女）

種類によっては美味しい。黒ビール。アサヒスーパードライ。一人では飲まない。そこまで欲しくない。飲みだしてから最初の一年くらいは美味しくなかった。アサヒを飲んだら美味しく思った。みんな飲んでるから美味しく思えるようになりたいと思っていた。

### 3-3. インタビューの分析

便宜上、ビールを美味しく思う度合いを話の内容から①「常に美味しいと思う」②「状況によって美味しいと思う」③「美味しいと思わない」の三段階に分けてみる。①と②は

共にビールを美味しく感じるというグループではあるが、一人で飲んでも美味しく感じるかどうかという点で明確な差が見られたため区別することにする。

\* 囲み線は女性

- |  |  |
|--|--|
| ①常に美味しいと思う<br>(一人でも美味しい)                     | D,G,J  |
| ②状況によって美味しいと思う<br>(飲み会のときだけ、最初の一杯だけ、最初の一口だけ) | A,B,C, <u>E</u> , <u>F</u> , <u>L</u> , <u>I</u> ,M,N, <u>Q</u> , <u>S</u> |
| ③美味しいと思わない                                   | H,K, <u>O</u> , <u>P</u> , <u>R</u>  |

インタビューの中から重要であると思われる内容について以下にまとめる。

i 初めから美味しいと思う人は誰もいない。

インタビューの対象者全員に共通して言える事は、ビールの味を初めから美味しいと思う人は誰もいないということである。この事からビールの独特の苦味を含んだ味は、伏木亨の研究で言われていたように、本来好ましい味ではない事がわかる。ビールの味を美味しいと思うようになる感覚、またそのような経験は後天的に得るものである。

では、いつから不味いと思っていたものを美味しいと思うようになるのか。インタビューからその時期について見てみる。

上記の ABCDGKLMSは大学入学後一年くらいの間で美味しいと思うようになると語っている。もちろんその時期には個人差があり、また個人の中でも、明確に変化した瞬間を覚えているわけではない。だがこの期間に多くの人が美味しさの変化を感じていることには理由があると思われる。

ii 美味しさは状況による影響を強く受ける。

- B 飲み会じゃないと飲まない。
- C 最初の一口だけ美味しい。
- D 疲れているとき美味しい。
- E 一人では美味しいと思わない。飲み会の最初の一杯だけ美味しく思う。
- F 最初の一口は美味しいと思う。

- G 何かやり遂げたときに美味しい。運動したときとか美味しい。
- I 一人では飲まないが、誰かと一緒だと楽しくなれる。
- L 乾杯の一杯が好き。一人では飲まない。
- M 一杯目は美味しいが二杯目は苦い。飲んでいくうちに一杯くらいは美味しく感じる。
- N 最初は美味しいあとから不味い。一人では飲まない。
- Q 初めの一杯はビールを飲む。
- S 一人では飲まない。

上に挙げたようにビールを美味しいと感じるとき、いくつかの限定的な状況である場合が多い。多くの人がビールを美味しいと感じながら、状況による影響を受けずに、自分の嗜好として美味しさを感じている人は僅かしかいない。そして美味しさを感じる状況として、多く見られた語りは「最初の一口（一杯）だけ美味しい」と「飲み会じゃないと美味しくない（一人では飲まない）」というものである。

「最初の一口（一杯）だけ美味しい」という語りがされるのは、ビールの性質による生理的な理由があるとも考えられる。つまり単純にたくさん飲むと、もう欲しくなくなるという理由である。ビールに限らなくても飲み物を何杯もがぶがぶ飲むことは、よほど喉が渴いていなければ避けたいものである。また O さんが言うように「たくさん飲むと炭酸がたまって辛い。」というものの理由として考えられる。

しかし「飲み会じゃないと美味しくない（一人では飲まない）」という理由は極めて生理的な面から外れた、美味しさの構成要素であると言うことができる。ビールの美味しさにこのような要因があることは、単に味が美味しさを示すのではなく、状況が美味しさに与える影響をはっきりと示している。

- iii 「飲めるようになりたい」という語りが見られる。
  - B 「慣れようと毎晩一本飲むことをノルマにした」
  - H 「美味しく思えるようになりたい」
  - I 「美味しく思いたい。飲み会るとき飲めるといいので。」
  - M 「飲める方がいいとは思ってた」
  - O 「飲み会で全然飲めないと嫌だから、飲めるようになりたい。」
  - P 「飲み会の席で一杯目は必ずビールなので美味しく飲めるようになりたい。」
  - R 「ビールを飲めるようになりたい。最初の乾杯のときに飲めないから。」

(美味しく飲むための飲み方を教わる例)

- A 「『のどで味わう』って言われてから美味しく感じた」
- J 「親に『ビールはのど越し』って言われてからのどで味わうようにした」

上にまとめたようにこのような語りは全体を通して多く見られた。また「美味しくない」と答えた5人(H,K,O,P,R)に着目した場合、そのうちK以外の4人が「美味しいと思いたい」という内容を語っている(Kは少し変わった事情があるためほぼ全員と考えても良さそうである)。つまりインタビュー対象者のほぼ全員が「(状況により)美味しいと思う」か「美味しいと思いたい」と考えていることがわかる。

「慣れようと毎晩一本飲むことをノルマにした」と語ったBの例を見てみると、彼は「美味しく思いたい」と思うことによって、初めは美味しいとは思わなかったビールの美味しさを獲得した。今回のインタビューでは、他に彼のような話を聞くことはできなかったが、私はそのような話を何度か聞いたことがあり、彼は特別に珍しい存在ではない。

しかしある食べ物を美味しく思うかどうかは、本来その人の好みの問題である。では、なぜ「美味しいと思わないもの」を「美味しいと思いたい」と考えるのだろうか。

#### 4. 考察

まず考察に入る前に、インタビューの分析からわかったことについてまとめていこうと思う。

i からわかったことは、ビールの美味しさは後天的に獲得されるものである。そしてその時期は大学入学後に集中している。

ii からわかったことは、ビールを美味しいと感じるには、特定の状況が強く影響することである。多く見られた例としては「飲み会じゃないと美味しくない(一人では飲まない)」という語りが挙げられる。

iii からわかったことは、ビールを美味しいと思えるようになりたいという考えが多くの人から読み取れることである。

以上のことから、今回のインタビューでは先行研究で見られたような味以外の要素が強い影響を与える美味しさの存在を確認することができた。また願望を内面化することによる、美味しさの感じ方の変化も見ることができた。そこで、この考察では「なぜ美味しいと感じない味を美味しく思うのか」について考えることにより美味しさについての理解を深めたいと思う。

美味しいと思わない味を美味しく思いたいという意志が働くには、それなりの理由があるはずである。そうでなければ自分が美味しいと思うものだけを食べ、美味しいと思わないものを遠ざけていれば良いだけの話である。つまりビールを美味しく飲めることが自分にとって有益であるか、もしくは不利益を被らずに済むということが考えられる。実際にインタビューの中で、美味しいと思えた方が良い理由を探すと、以下のような語りが見つかる。

- 「飲み会のとき飲めるといいので。」
- 「周りの先輩がイッキしていて自分もあぁなりたと思った。」
- 「飲み会で全然飲めないと嫌だから、飲めるようになりたい。」
- 「飲み会の席で一杯目は必ずビールなので美味しく飲めるようになりたい。」
- 「ビールを飲めるようになりたい。最初の乾杯のときに飲めないから。」

理由について述べているのは全て女性であるが、男性にインタビューしたときに理由について深く聞かなかったため、理由の語りやすさに対してジェンダー差があるかどうかはここからはわからない。

この語りからわかる事は、ビールを美味しく飲めることは、飲み会という場において有益であるということである。そこで飲み会という場とはどんなものだろうか、考えてみる。

もちろん様々な趣旨の飲み会があり、それぞれ異なる雰囲気や目的を持っていると思う。しかし飲み会はお酒を飲む場であり、コミュニケーションの場でもあるということは変わらないだろう。そして、そこにはいくつかの守るべき暗黙のルールが存在するように思う。例えば、お酒を勧められたらなるべく断らない。または乾杯は全員が席についてから、というものである。今回のインタビューでは、「乾杯の一杯は、好き嫌いに関わらず、全員ビールを飲む」という話が多く聞かれた。これもまた飲み会での規則の一つだと考えられる。

このような規範は多くの人が集っていればいるほど、破り難い規範になる。大学に入学して初めてそのような規範に直面した人達も、先輩や周りの人に教わりながら、それらの規則を守らなければならないものとして受け入れてきたと思う。そこでは自分の好き嫌いを通すのではなく、その規範に準じることによって飲み会という場を楽しもうと考えるようになる。

ここに「なぜ美味しいと感じない味を美味しく思うのか」という問いの答えがあると私は考える。美味しくないと感じるビールを規範のために飲まなければいけない時、「美味しい味ではないビールを美味しく思いたい」という考えが生まれるようになったのではないだろうか。つまり、それは、ビールを美味しく思う努力によって、規範を守り、葛藤を起ささないようにする意志である。ビールの美味しさを学ぶことは、お酒のマナー、または大人としてのマナー学ぶことに由来しているのではないかと考えた。このように考えるとビールの美味しさを感じるようになる時期が大学入学後である事ともつじつまが合う。

以上のことをまとめると、ビールの美味しさとは、生理的には感じられにくいですが、飲み会の中に存在する大人社会とうまく同化する為に体得された快感であるという結論に至る。

## 5. 終わりに

Fさんがインタビューの中で言った言葉に気になるものがあった。  
「初めて飲んだのは文化祭だった。そのときは楽しくて美味しく感じたかもしれない。」

この時 Fさんは、初めて飲んだビールを思い出深く語ったが、美味しさについては良く覚えていなかった。これは研究を始めて自分が頻繁に感じたことでもあるが、美味しいかどうか、どのように美味しいか、は案外はっきりと意識されていないということである。今まで美味しいと思っていたものを「本当に美味しいのだろうか」という気持ちで美味しさについて検証すると、その美味しさを見失ってしまう。美味しさという感覚はそれほどまでに移ろい易いものであると実感した。

今回の研究で、ビールの美味しさについて多くの人に答えてもらったが、答えにくい質問であったと思う。上に記したように、美味しいと思うことはあっても、そのときの状況や気分や体調などによっても変わりうる感覚である。

しかしこのような事はビールに限ったことだけでなく、全ての食べ物について言えることである。私が始めに書いたラーメン屋さんのラーメンをととても美味しく感じることも、私の内側にある様々な思いを映し出しているからなのだろう。

### 参考文献

伏木亨, 2005, 『人間は脳で食べている』, 筑摩書房

伏木亨, 2005, 『コクと旨味の秘密』, 筑摩書房

森枝卓士, 1999, 『味覚の探求—美味しいってなんだろう』, 中央公論新社